

## 特別寄稿

# 酒場利用の発展段階と分岐点

ペンネーム

碓田 素州

酒場利用

### はじめに

酒場ネタが続いてすみません。筆者のような上昇志向の全くない中年サラリーマンにとって、酒場は生きていくための必須アイテムなのです。もちろん、酒を飲むだけなら自宅でもできますが、なけなしの労働意欲を再生産させるためには酒場という装置を介さなくてはなりません。

今回は、酒場シリーズのまとめとして、「オトーサンが労働意欲再生産のために一人で一軒だけ寄って帰る」ことを前提とした酒場利用について、年代別にその特徴を記述するとともに、オトーサンが帰るべき家を失わないための酒場の利用方法について提議させていただきたいと思います。そういうわけで、「ちよつとお酒を飲んだらついつい元気になってしまつてカオリちゃんやエリーちゃんのところへハシコをするうちに終電に乗り遅れて翌日は二日酔いで・・・」なんていうのは除外させていただきます（話としてはこちらの方が断然おもしろかったです）。

### 年代による酒場利用の変遷

#### 一、オトーサン前史・・・勝負利用段階

酒場を利用開始するのは、一般的に、中・・・じゃなくて、成人

# 人生50年、それぞ"れ"の酒場

## ① 銘酒居酒屋

・好きな酒：日本酒特別吟醸  
(複雑な名前ほど良い)



一部上場企業・部長 (50)

- ・日本酒の銘柄にうるさい  
(味は良くおからないが…)
- ・サングラスはハラワタも食べる
- ・若い頃は、会社の屋上で  
バレーボールをしたものだ。
- ・三ツミ系女子高に通う  
長女(17)が、援助交際して  
いるのを知らない。

する頃であるといえます。ただし、若年期における酒場利用は、  
①友人との健全な交流と②異性と不純な交友のための手段であり、オトサンとは、結局することは同じでも、当初利用目的が違います。

### (1) 学生期

まだお酒を無謀に飲むしか知らない段階。前記①の場合では、チエーン居酒屋でフライドポテトやウインナーなどの脂っこいつまみを、青リンゴソーワやカルピスハイとかいう名古屋テイスト飲料で流し込み、衝動的放送禁止行動に走る者や救急車のお世話になる者が多数輩出されます。そんな状況下でも、目敏くターゲットを酔わせ、介抱しちやおうなんて考えている正直な若者(前記②ですね)も結構いたりします。当然ながら、都の西北の私立大学生のような卑劣な手段は使いません。

### (2) 若手社員期

翌日の心配を多少はするようになる段階。前記①の場合では、会社の同僚や同期と、多少ランクの高いチエーン居酒屋で、上司の悪口をいいながらピッチャーのビールを注ぎつつ、◎◎育ちの××産野菜○○焼き△△風◇◇和え”とかいう不自然に名前の長いつまみを注文します。同②の場合、合コンなどでは①と同様の

そのようにして結婚して家庭を持ち、子供が生まれ、懇願して

二、オトーサン段階・・・労働意欲再生産利用段階

中に陥り、子孫繁栄先行型の結婚をされる傾向が強いです。

2 大衆酒場

・好きな酒：ペンキハイボール



広告下請会社・  
(自給)パートタイマー(50)

- ・オレのセンスが No.1 である。
- ・西麻布や大塚木などは 田舎者のかきばかりで落ちつかない。
- ・大衆酒場は「オシヤル」である。
- ・「茨城県 猿島郡 三和町 出身」というのが 人生最大の秘密である。

創作無国籍系酒場を利用することが多いようです。単独行動の場合は、小奇麗かつ薄暗いバーでドラマイマティーニを片手に、お持ち帰りを成就すべく一発勝負に挑んだりいたします。いずれにしても、年齢が上がるにつれて女性側の勝負度が高くなります。そんななかで「俺はそんなへまなんかしねえよ」という自信満々の方が、まんまと術

も合コンに誘われなくなると、オネーサンのいる酒場に通うようになりませんが、オネーサンの名刺が妻に見つかったり、子供がケータイをいたずらしてリダイヤルされてしまったりとかで、火遊びもしばらくお休みにしようと思ったりするときに、オトーサンとしての酒場利用が始まります。もっとも、当の本人にしてみれば、オトーサンになったという自覚なんかありません。気づくのはずっと先のことです。

以下では終身雇用・年功序列を前提とし、かつ、その前提が崩れつつある会社のサラリーマンをモデルとして、年齢と会社内階級による段階的な酒場利用のケースを例示いたします(図1・表1)。

モデル設定(スタートライン)

三四歳 会社員 係長

家族：妻三一歳(専業主婦) 長女二歳(妻はそろそろ二人目が

欲しいらしい)

一ヶ月あたり小遣い：昼食費込四五、〇〇〇円(係長になって、

五、〇〇〇円アップした)

●三〇歳代

係長級：

図1 社内階級と酒場利用の発展段階モデル

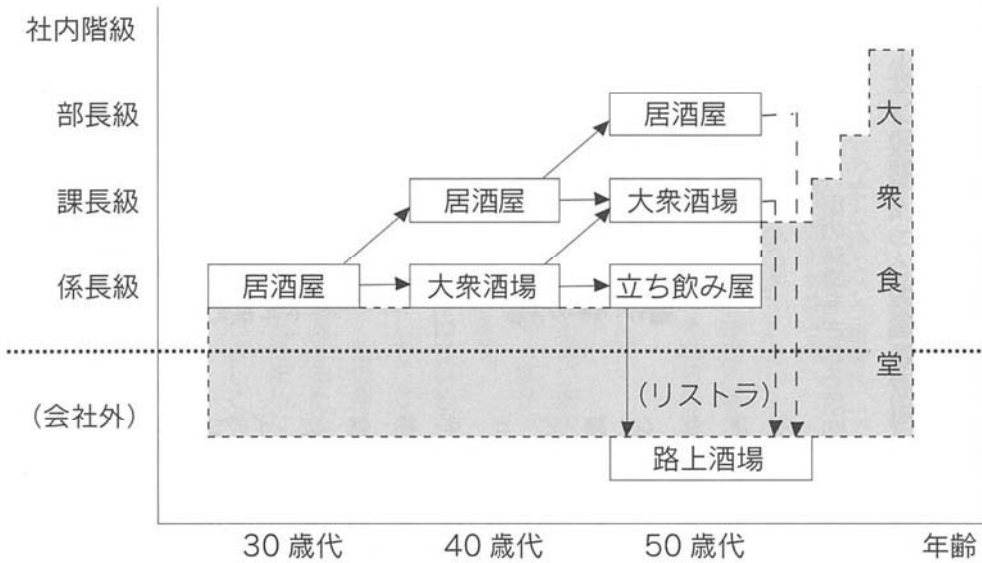


表1 使用金額階層別にみた酒場分類

酒場分類	1回あたり 平均 使用金額	利用事例			備考
		酒類	肴類	合計	
(銘酒) 居酒屋	2,500円 以上	生ビール @600円 冷酒 @600円×2	お通し@300円煮 こごり @500円 マグロ刺身 @800円	3,500円	◎会計不明瞭(根拠 不明)の場合が多い。 ◎明瞭会計の場合 は外税が多い。
大衆酒場	1,500～ 2,500円	ホッピー 300円×2 ウーロンハイ 250円	マグロブツ 300円 厚揚げ 300円 ポテトサラダ 200円	1,650円	
立ち飲み屋	500～ 1,500円	チューハイ 180円×3	煮込み 160円 ウインナいため 160円お から 120円	980円	◎会計は代金引換
路上酒場	500円 未満	200mlパック酒 95円×3	乾物セット 188円	税込 497円	◎未利用資源再利 用、拾得物利用もあ り。
大衆食堂	1,000～ 1,500円	ビール大瓶 500円	アジフライ定食 700円	1,200円	

注) 「おでん」、「焼き鳥」等の専門料理型酒場を除く。

年功序列によって同期はほぼ同時に係長になりました。そろそろ自分だけの「行きつけの店」が欲しくなります。一人で酒場に入るのは、最初はなかなか決断が必要なので、店内の様子がわかりやすいため比較的入りやすい焼鳥屋などにしますが、店主が威張ってるし、スーツに匂いがつくし、おまけに尿酸値まで上がるしと口なことがありません。そこで次に、「シブくて粋な大人」ぶるために、新鮮な魚介類と日本酒の種類の多そうで、かつ数居の高くなさそうな居酒屋へと足を向けるようになります。

## ●四〇歳代

課長級の場合：

彼を含めた同期の半分弱が課長に昇進しました。人生は順調です。自分は能力があるので当然であると思っています。それにひきかえ、近頃の若い奴はなっていないと思います。最近、魚のうまい店を見つめました。日本酒の銘柄も結構覚えめました。でも、漬物が既製品であることや酒の原料に醸造用アルコールが入っていることは全然気になりません。

係長級の場合：

同期のトップより昇進が三年遅れています。つい最近までは、結構焦っていました。家業を継いで銭湯を経営している同級生に連れられて大衆酒場に通うようになってから、これでもいいのか

なと思えるようになってきました。とにかく、気持ちが落ち着くんです。でも現実には、子供の教育費が高んで小遣いを減らされたり、社内では後輩に追い抜かれたりと辛いことばかりです。

## ●五〇歳代

部長級の場合：

同期で部長になったのは今のところ一人だけです。彼はそのうちの一人です。もう一人は彼よりもずっとレベルの低い大学出身ですが、人づきあいがうまく役員ウケがいいのが気に入りません。仕事の実力は俺の方がずっと上だ、と彼は思い続けています。でも、銘酒屋酒屋に通う限り、社内生存競争を戦い続けます。彼にとつて、銘酒屋酒屋が明日への闘志を再生産させる場所なのです。明日は役員とゴルフです。早めに我が家へ帰って準備をしましょう。

課長級の場合：

部長になれなかった先輩達の半数以上は、片道切符を持って子会社へと出向していきました。途中で人身事故を起こして東西線を一時間ほどストップさせた者もいます。次は自分の順番でしょうか。子供が大学を卒業するまでの、あと何年間は子会社にしがみついても生きていかなければなりません。

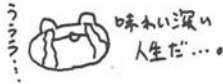
そんな彼には、大衆酒場が世界で唯一心の安らぐ場所なのです。できることなら、もう一杯飲めるだけの小遣いが欲しいと思っ



中継で阪神タイガースのめつたにない快進撃をながめつつ、「俺の人生だって、まだ終わっていない」と自分に言い聞かせることにしましょう。この原稿が印刷される頃には阪神は終わってしまっていて、毎年の定位置に戻っているかもしれない。

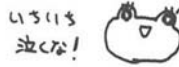
## 4 路上酒場

・好きな酒：ワンカリア



### フリーター？(50)

- ・吉田拓郎にあこがれて18歳で上京。
- ・国鉄・中央線沿線で音楽活動をしたが、芽が出なかった。
- ・ずっと土木作業員として生活してきたが、不況で家賃が払えなくなった。
- ・また、音楽で飯を食う夢を捨てるわい。



さあ、大衆食堂に行きましょう。そして、我が家に帰りましょう。これが真実です。ただし、残念なことに、外食文化の遅れている北海道では、札幌のような大都市においてすら、大衆食堂があるのは学生街である北海道大学周辺くらいで、とてもオートサンがお酒を飲める雰囲気ではありません。

## おわり

さて、みなさまは初めて酒場に行ったのはいつの頃でしょうか。

筆者の場合は、小学校低学年でした。もちろん父親に連れられてのことです。繁華街のはずれにある薄汚い焼鳥屋で、いつも炭火の煙が店の前の狭い歩通路路に充満しており、店内はくたびれたオートサンたちでいっぱいでした。

そんななかでも、オートサンに連れられた子供が何人かいて、同級生に会ったりすると、「まあまあ、一杯。」「あつ、どーもどーも。」とかいいながら、果汁の入っていないオレンジジュース(リボンシトロン!)の瓶を傾けて大人の真似をしたものでした。昭和の子供達にとって、酒場というのは、銭湯などとは違った意味で大人の世界を体験する重要な装置だったのです。

なお、筆者が父親に連れられていったこの焼鳥屋は、確か第二次オイルショックの頃に新築・移転して規模拡大し、昭和が終わる頃には現代風居酒屋になり、何年か前に閉店したようです。つくづく時代は移り変わるものです。

そういえば、酒場で父親に連れられた子供を見なくなりましたねえ。

がんばれ北海道のオートサン！(PART II)